

クリエイティブな映像制作で道路交通の 安心安全を守る！

1 目的・概要

本プロジェクトの目的は、より多くの人に道路交通の安心安全を守る意識を高めてもらうことです。私たちは沢山のの人に情報をわかりやすく伝えられる手段の一つである「映像」を活用し、視覚や聴覚に訴えられる啓発動画を制作しました。大学生ならではの視点でクリエイティブな工夫を凝らし、各地で放映することで目的を達成できると考えました。

実際の活動では映像制作技術の習得に取り組むとともに、制作した動画を各地のデジタルサイネージで放映するための交渉を行いました。また私たちだけでなく地域の方々にも映像制作に参加してもらうことで、当事者意識を高める取り組みを実施しました。



Annual Schedule

- | | | |
|-------|-----|------------------------------------------------------|
| 2024年 | 4月 | 自己紹介。リーダー・各担当者決定
映像制作の手法の学習 |
| | 5月 | 映像制作の練習。今後制作する
動画のテーマ決定 |
| | 6月 | 小さなグループに分かれて映像を制作
NEXCO 西日本、京都市・京都府警察に
放映の交渉開始 |
| | 7月 | 春学期成果報告会に向けて準備 |
| | 11月 | 今後制作する動画のテーマ決定 |
| | 12月 | 参加型の映像制作を実施 |
| 2025年 | 1月 | 最終成果報告会に向けて準備 |



2 成果達成度

クリエイティブな映像制作という観点では、限られた予算や時間の中で様々なテーマや手法を使用した動画を制作しました。テーマは自転車のながら運転や標識無視や自動車の死角の危険性を訴える動画、電動キックボードの正しい使用方法を伝えるテーマを取り上げ、映像手法は、手書きのイラストや実写、CGなどを効果的に使用して制作しました。またVRや参加型のクラウドソーシングなど新しい映像制作の方法を模索しました。クラウドソーシングでは地域の方々に描いていただいた絵を使用し、参加型で動画を制作することで当事者意識を高めてもらうような活動ができました。



それらの動画は自転車コンテストやACジャパンなどのコンテストへ応募するだけでなく、各地での放映の交渉をしました。NEXCO コミュニケーションズに放映を依頼し、全国各地の高速道路のSAで居眠り運転事故防止を訴える映像を放映しました。今後は、京都府警察と京都市の方々にご協力いただき、ヘルメット着用と自転車のロックを促す映像を放映する予定です。

これらの活動を通じて、本プロジェクトの目的である映像を観ていただいた方々に交通安全の意識を高めてもらう取り組みを行うことができました。

3 プロジェクトを通じて

学年も学部も異なるメンバーが集まったこのプロジェクトでは話し合いの際に、様々な面白い意見が出てきます。どれも自分一人では思いつかなかったようなアイデアに出会えたことはとても貴重な体験でした。しかし時には相反する意見が出てくるときもありました。全員の意見をすべて取り入れることが理想ですが、最終的にはどちらかの意見を採用しなくてはチームが一つになって前に進むことができないという場面もありました。

そうした状況で重要になるのは、お互いの意見を尊重することです。一般的にお互いの意見を尊重するというのは、自分の意見だけを主張せず、相手の話もしっかり聞きましょうというような文脈でよく使われます。私はそれだけではなく、自分の意見を言うことを抑えるのではなく、チーム全員が積極的に話し合いに参加することでより良い話し合いができるという意味もあると思います。ス

ムズな話し合いのためには、チーム全体の雰囲気や話の流れを汲み取ることは重要です。しかしせっかくの良い意見や考えを持っているのに言えないのはチーム全体として考えるとマイナスになると思います。このように相反する意見がでてくるこそが、高めあえる話し合いの雰囲気を作れていたと思います。そして相反する意見が出て対立が生まれなかったのは、お互いの意見を聞き合う姿勢を持っていたからです。意見を衝突させて戦う討論ではなく、冷静に利点や欠点を見極めて新しいアイデアを練り上げる議論ができたから納得感のある活動ができたのだと感じています。



長期休みや忙しい時期などはモチベーションの維持が課題でした。それを乗り越えられたのは、それぞれのスケジュールや得意分野、負担できる作業量が異なる中で、忙しいメンバーをサポートする意識があったからだと思います。常に同じ量の仕事を割振るのではなく、誰かが忙しい時期は他の人がカバーすることでチーム全体のモチベーションを持ち直すことができたのだと思います。また定期的に自分たちの立ち位置を振り返る時間を作りました。自分たちのこれまでの成果とこれからやるべきことを整理することで、お互いの強みを認め合うコミュニケーションをとることができました。お互いの状況に合わせて尊重することでモチベーションを維持するように取り組めたと思います。

このプロジェクトを通じて学んだ経験を今後の活動や自分自身の成長につなげていきたいと思いません。一年間ありがとうございました。



編集後記

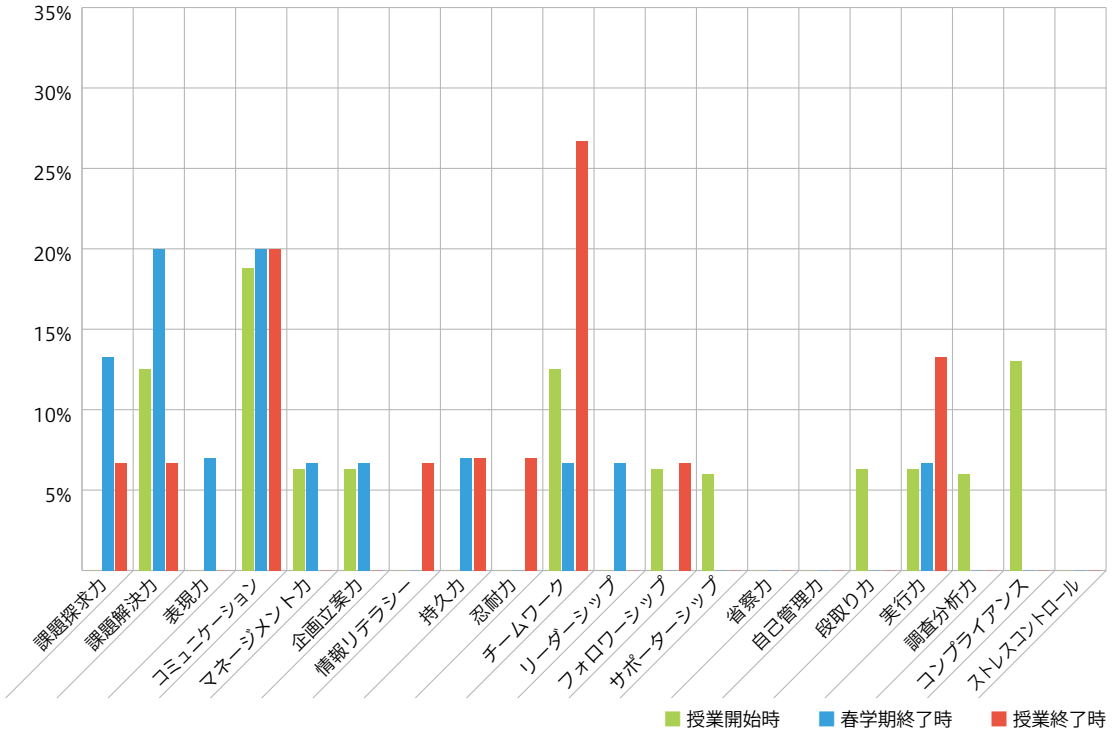
報告書を書くことは、一年間の活動を振り返るとともに、チームで取り組んできた一つ一つのことじゅっくり向き合う時間になりました。これまで様々な人のご協力のもと活発な活動ができたと感じております。地域の皆様には映像制作にご協力いただき、京都府警察や京都市、NEXCO 西日本の皆様には放映にご協力いただきました。この報告書の執筆にあたってはSAの住友さんにご協力いただきました。一年間支えてくださった科目担当の先生方やSAの方、プロジェクト科目事務局の方々、そして活動メンバーには大変お世話になりました。関わってくださった全ての皆様に深く感謝申し上げます。

プロジェクトメンバー

神田 載伸(法4) 梶川 碧(政策2) 近藤 安香里(文化情報4) 吉野 紘司(社会3) 木野 邑 匠史(理工3)

プロジェクト活動 アンケート集計結果

Q1. チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んでください。



Q2. プロジェクト活動を通じて実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んでください。

